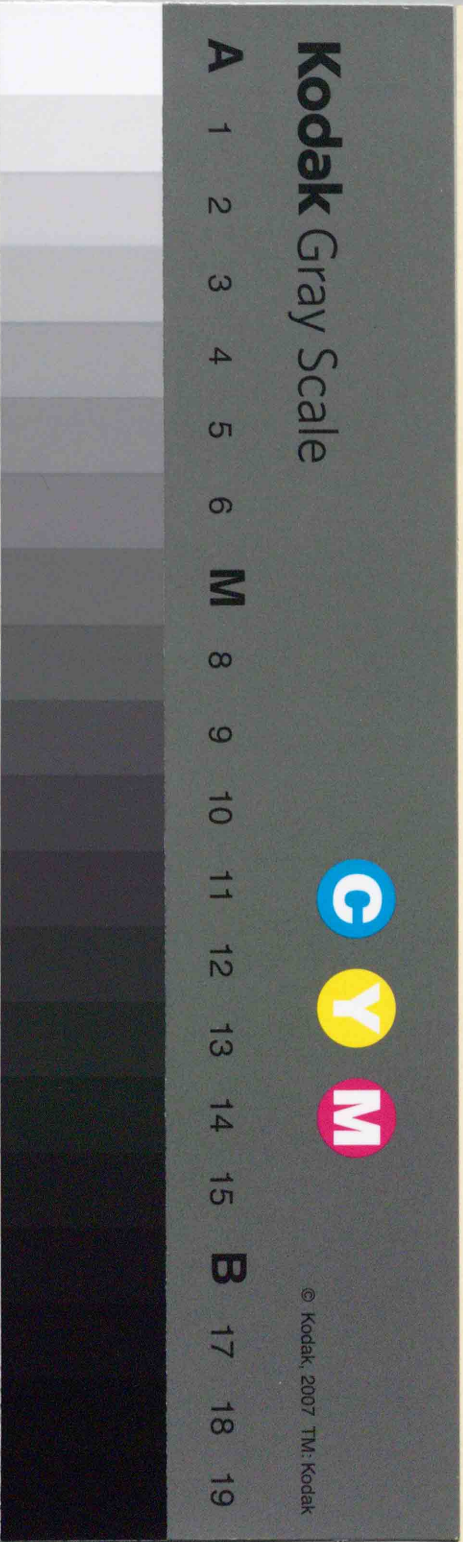
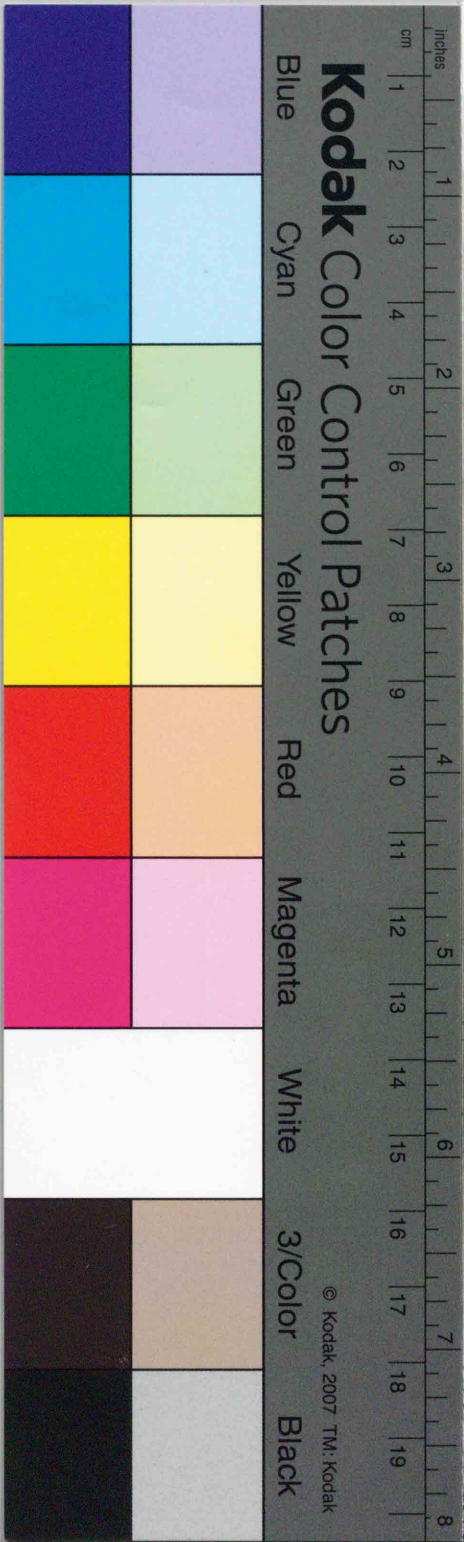


高等小學讀本 卷二

375.9
Ni19
資料室



30205 ✓

教科書文庫

3
810
32-1900
200030 1430

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



資料室

3759

明治三十三年一月十日 文部省檢定
高等小學校讀書科用



伯爵 副島種臣 閱
伯爵 東久世通禧 閱
西澤之助 編

高等小學讀本

東京 國光社藏版



高等小學讀本卷之二

目次

- 第十一課 大日本國 十五
- 第十二課 まごころ 十七
- 第十三課 藤原鎌足 二十
- 第十四課 學問 二十三
- 第十五課 秋の田 二十五
- 第十六課 植物ノ種子 二十七

高等小學讀本卷之二

- 第七課 開墾 二十
- 第八課 世ハ相持 二十三
- 第九課 廣澤安任 二十五
- 第十課 運送 二十九
- 第十一課 港 三十二
- 第十二課 貿易 三十六
- 第十三課 工藝 三十九
- 第十四課 鑛物 四十一

- 第十五課 佐藤信淵(一) 四十四
- 第十六課 佐藤信淵(二) 四十八
- 第十七課 旅行 五十
- 第十八課 海防 五十三
- 第十九課 動物の自衛 五十六
- 第二十課 大砲 六十
- 第二十一課 恤兵 六十三
- 第二十二課 軍旗 六十八

第二十三課 平壤の戦 七十三

第二十四課 有栖川宮 七十三

第二十五課 御國の民 七十七



高等小學讀本卷之二

伯爵と東久世通禧

副嶋入種臣

西雨澤之助

大日本國

我が大日本國ハ萬世一系の天皇の知る

しめす御國なり。

歴代の天皇聖徳高くまじりて深く臣

民を憐み給ひ、又、臣民ハ、忠誠にして、事ある
 時ハ、義勇、公に奉じて、身を顧みざりき。され
 ば、古來、曾、國威をおとし、ことなし。
 四方ハ、皆、海にして、自然に、隣國と、境を隔て
 たり。氣候、溫和にして、南北兩端の地を除く
 外ハ、寒暑、共に甚しからず。頗、人の生活、よ
 ろし。

國內、地味肥ハ、田園連りて、穀物、菜蔬、ゆたか
 に、森林茂りて、良材多し。又、山よりは、金、銀、銅、
 鐵、石炭等を出だし、海よりは、魚介、海藻等を
 産す。
 我等、此の國に生まれたるは、實に、此の上も
 なき幸なり。
 第二課 ままごころ
 すめら御國のものゝふは
 いかなることをかつとむべき

百廿八、高麗小國誌本卷之二

た、身にもてるまごころを

君とおやとにつくすまで

我が國に生まれたらんものは、男も、女も、老いたるも、若きも、貴きも、賤きも、皆、この心がけなかるべからず。

君を尊み奉りて、おきてを守り、常には、己が業をよく勉め、若、事あらんには、君の爲、國の爲に、身をも顧みざるは、臣民たるもの、道

にして、即、君に、まごころを盡すなり。

親を敬ひて、教に背くことなく、親の心を、心として、身を立て、家を興すは、子たるもの、道にして、即、親に、まごころを盡すなり。

かく、君と親とに、ま心を盡して仕ふるは、人の人たる道にして、古の、孝子と謂はれ、忠臣と稱へられし人々も、唯、此のまごころを盡

し、なり。

忠臣

第三課 藤原鎌足

藤原鎌足ハ、モトノ氏ヲ中臣トイヒキ。ソノ
先祖天兒屋根命、天孫瓊々杵尊ヲ佐ケマ
ツリシヨリ、子孫世々朝廷ニ仕ヘ奉リテ、祭
政ノコトヲ掌リキ。

皇極天皇ノ御時、大臣蘇我蝦夷、私ノ振舞多
ク、其ノ子入鹿モ、亦ホシイマ、ナリシカバ、
鎌足、皇室ノ御爲ニ、之ヲ除カントテ、竊ニ、

中大兄皇子ト、心ヲ合ハセ、謀ヲメグラシテ、



時ノ來ランヲ待
チ居タリ。

タマノ、三韓ノ

使參リテ、貢物ヲ

奉ルコトアリケ

レバ、コノ機ヲ失ハジトテ、蘇我倉山田石川
磨、佐伯子磨等ト、手筈ヲ定メタリ。

此ノ日、天皇、大極殿ニ出御マシテ、入鹿ハ、御前ニ侍セリ。石川磨、三韓ノ表文ヲ讀ムニ、聲ワナ、キシカバ、入鹿怪ミテ、其ノ故ヲ問ヘルニ、御前ニ近ケレバ、畏サニ、カクワナ、クナリト答フ。コノトキ、カ子テ謀リシ如ク、皇子等進ミ出デテ、入鹿ヲ斬リ、又、兵ヲ遣シテ、蝦夷ヲモ誅シ、遂ニ、蘇我氏ヲ滅ボシケリ。

コレヨリ、鎌足、皇子ヲタスケテ、政ヲ執レリ。後、皇子、御位ニ即キ給フ。天智天皇ト申シ奉ル、是ナリ。鎌足、内大臣ニ任ゼラレ、藤原トイフ氏ヲ賜ハリ、其ノ子孫、永ク繁昌セリ。

第四課 學問

人ハ、生まれながらに、萬事を知れるものにあらず。皆、生まれて後に、學びて覺ゆるなり。我等、學校に入りてよりは、日々、先生の深切

なる教を受けて、既に尋常小學校の教科を卒へ、今ハ高等小學校に進みたり。此の間に、我が身の心得より、君を尊び、親に事へ、兄弟、朋友、親類に交はる道などをも、ほゞ學びて、有益なる智識を得たることも、尠からず。されども、我等が學ぶべきことは、之に止まらざれば、尚此の上にも、愈學問して、徳を修め、智を磨き、身を立て、家を興し、御國の爲に、

力を盡さんことを心がくべきなり。

第五課 秋の田

秋風、身にしみて、葉末の露、漸しげく、野山の草木、薄く濃く染め出でたり。田の面の早稲ハ、既に刈り取り、中稲も、はや實り、晚稲も、大方熟して、穂先、重げなり。

農夫等の、春、種を播き、夏の初植ゑつけてよ、り、水にも、早にも、遇はず、案じたりし厄日も、

無難に過ぎ、丹精せし
 効も顯れて、かく豊に
 熟したるを見るは、如
 何ばかり嬉しからん。
 今ハ、老いたるも、若き
 も、皆野に出でて、蒔る
 もあり。干すもあり。此
 處には、人々の笑ひさ



いめく聲聞ゆ、彼處には、少女等の節たもし
 ろく、歌をうたふもありて、いと楽しげなり。

文法

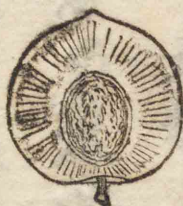
漸、豊に、皆、いと、愈、遂に、即、若、かく、唯、頗、實に
 等ハ、動詞、形容詞ナドニ副ハリテ、ソノ意
 義ヲ修飾スル詞ナリ。之ヲ、副詞トイフ。

第六課 植物ノ種子

多クノ草木ハ、花ヲ開キ、實ヲ結ブ。實ニハ、種
 子アリ。コノ種子、地ニ落ツレバ、芽ヲ生ジ、成
 長シテ、更ニ、許多ノ實ヲ結ブ。カク、種子ハ、各、

一個ノ植物トナルガ故ニ、蕃殖、甚速ナリ。
果實、及、種子ニハ、ソノ形狀、サマノミアリ。米、
麥ノ如キハ細長ク、豌豆ノ如キハ圓シ。又、西
瓜、南瓜ノ種子ノ如ク、平タキモアリ。

梅、桃等ハ、一個ノ實ノ中ニ、各、一箇ノ種子アリ。又、瓜、茄子ノ如ク、一箇ノ實ノ中ニ、無數ノ種子アルモアリ。桑、松ノ如ク、無數ノ果實集マリテ、一團ト



ナレルモアリ。

楓、蒲公英、薊ノ如キハ、種子ニ、翼アレバ、風ニ吹カレテ、遠キ處ニモ蕃殖スルナリ。

種子ノ、熟シタルハ、ヨキ植物トナリ、熟セザルハ、全ク、芽ヲ生ゼザルコトモアリ。サレバ、之ヲ播カンニハ、良キ種子ヲ撰ブコト肝要ナリ。

其ノ方法、種々アレドモ、米、麥ノ如キハ、鹽水、

若クハ、苦鹽ノ中ニ浸シテ攪キ廻スヲ、簡便ナリトス。サテ、熟セザルハ浮ビ、熟セルハ沈メバ、之ヲ見テ、ソノ良否ヲ判別スベキナリ。

第七課 開墾

荒蕪の原野を拓きて、田畑となし、地味に應じたる穀物、野菜、若くハ、桑、茶等を作り、牧畜に適する地には、牛、馬、羊、豚等の類を飼ひて、之を蕃殖せしめば、其の利益大なるべし。

我が國ハ、太古より、農業を重んじたれば、田園、多く開けたれども、東北の地方には、未墾の原野、尚少からず。殊に、北海道の如きは、居民少くして、荆棘の生ひしげるに任せたる廣原多し。



又、南方なる臺灣には、一年、數の回收獲ある
稻田とするを得べき地も、未開拓せられざ
る處あり。
近時、開墾に従事するもの、漸多く、北海道移
住者の如きは、其の數、年々に増加せり。
また、太平洋をへだてたる墨其西哥、中央亞
米利加等には、沃野、千里相連りたれば、我が
國民の、こゝに到りて、開墾を事とするもの

少からず。

第八課 世の相持

昔、或人、航海しけるに、折あしく、暴風にあひ
て、船は破れ、乗組の人は、皆死して、獨、何處と
も知らぬ離嶋にたゞよひ着けり。自由大
住む人もなければ、救を求めんよしもなし。
水を飲まんともすれども、井戸なければ、泉を
求めて、辛うじて、渴をうるほし、食物を得ん

とすれども、賣る者もなければ、木の實をひ
 るひ、魚鳥をとらへて、飢をしのぎ、家をけれ
 ば、巖のかけに立ち寄りて、雨を避け、木のう
 つろを、宿として、露を凌ぐなど、不自由、大方
 ならざりきとぞ。
 かくの如く、すべて、世の中ハ、一人のみにて
 は、生活を全くし得べきものにあらず。家族、
 親族、同郷の者、又ハ、同國の者、相助けて、生を
 營むべきものなり。されば、人は、己一身の利
 益をのみ圖らず、衆人、互に、力を合はせ、公共
 一體の心得あるべし。諺にも、世は相持とい
 ふことあるなり。

第九課 廣澤安任

安任ハ、通稱ヲ、富次郎トイフ。家、世々、會津ノ
 老臣タリ。明治ノ初年、會津藩主ハ、ソノ封ヲ、
 斗南ニ移サル。斗南ハ、陸奥ノ東北ニアリテ、

氣候寒ク、住民少ク、原野ハ、遠ク連レドモ、草
 深ク、地荒レテ、寂寥タリキ。
 安任、藩主ニ隨ヒテ、コ、ニ移リ、奮ヒテ、開墾
 ノ業ヲ起サントシ、先、北郡百石村ノ谷地頭
 トイフ原ヲ撰ビテ、牧畜ヲ企テタリ。
 コノ時、我が國ニテハ、牧畜ノ業、未盛ナラザ
 リシカバ、則ルベキ方法ナク、百事、皆、自、工夫
 セザルベカラズシテ、其ノ苦心、大方ナラザ

リキ。初、安任、所有
 ノ牛馬、僅ニ、數頭
 ニ過ギズ、牧場モ、
 亦廣カラザリシ
 ニ、夏ハ、コレヲ、野
 ニ放チ、冬ハ、コレ
 ヲ、舍内ニ飼ヒ、自、
 草ヲ蒔リ、水ヲ與



へテ、起臥ヲトモニシ、熱心ニ、其ノ業ヲ勵ミ
シカバ、次第ニ、盛大ニ赴キテ、僅ニ、十年ニシ
テ、牛馬ノ數、三百頭、牧場ノ廣サ、二千三百町
步ニ餘ルニ至レリ。其ノ他、六十町步ノ畠地
ヲ得、百餘町ノ森林ヲ造レリ。

此ノ後、安任ニ倣ヒテ移住スル者、年々ニ加
ハリ、終ニハ、大ナル村落トナリシカバ、安任
ハ、學校ヲ建テ、子弟ノ教育ヲ圖レリ。

明治九年、東北御巡幸ノ時、陛下、親シク、
安任ヲ、御前ニ召シ出デテ、牧畜ノ景況ヲ下
問セサセ給ヒ、ソノ牛馬ヲモ御覽セラレテ、
功勞ヲ賞シ給ヘリ。是ヨリ、安任ノ名、天下ニ
高シ。

第十課 運送

採炭所存の通り當地方ハ水陸の產物ヲ富
み居る一とも荷物の運送に人馬小舟の力

ふては到着もおくは賃物も相かきみおに
より折角の産物も殆ど打捨置く有様なるは
如何にも残念お存せられぬされば今後汽
船の航路を開き運送の便利を相圖り申す
は尚地方一般の希望も後皆は迷惑お可
何會社へなり共は相控下され成立致は極
は盡力お預りさく當地方産出額一覽表お
添願と作見ハ右に依頼申す支那の如くに

此座候向ふ

返事

所來論議承仕候所地方ハ實ニ山林亦富
原野も廣く且海も傍に居候へ運送の
便開け作らんは農工の産物も亦山林
薪炭類の賣捌も宜しく隨て商業も繁昌し
尚水産物をも賣かされ候て自然は地方の
富を増えべき事と存存候可運奔走仕

開港の便利を開けは、及ぶるに盡力
可致は、秀細ハ此事まじり、次第進て、可
上、作取、急ぎは、返りのみ申、三、派、拜、後

文法 原野も廣く、且、海にも接し居、且、材木、及、
薪炭、トイフトキノ、及ハ、上下ノ、語句ヲ、接
續セリ。之ヲ、接續詞トイフ。

第十一課 港

わが國ハ、東南に、太平洋を控へ、西北に、日本
海を擁し、南ハ、臺灣より、北ハ、千嶋に至るま

で、海岸、屈曲多くして、天
然の良港に富めり。

横濱は、東京灣の内にあ
りて、我が國第一の開港
なり。港内廣くして、船を
繋ぐに宜し。支那海と太平
洋との間を通航する船は、
概、こゝに寄港するが故に、船



船の出入、絶ゆることなく、貿易、甚盛なり。
 横濱より、西に向ひて、海上を駛すること、一
 晝夜にして、神戸に達す。その繁盛、横濱に次
 ぐ。こゝより、瀬戸内海を経て、馬關を過ぎ、遠
 く、九州の西に出でなば、我が國最古の開港
 たる長崎に到るべし。こゝも、亦、繁盛なる港
 なり。

長崎より、南に進まば、琉球を経て、臺灣に達
 すべし。こゝには、基隆、淡水、安平、打狗等の港
 ありて、支那との貿易、盛なり。
 長崎より、日本海を、北に廻れば、信濃川の河
 口に、新潟あり。北陸道の物産のあつまる處
 なり。又、津輕海峽に入れば、渡嶋灣内に、函館
 あり。北海道海産物の市場なり。兩港、共に、著
 名なる開港にして、露領の浦鹽ウラシ斯德スエ港に近
 ければ、他日、貿易、愈、隆盛に赴くなるべし。

開港は、諸外國と貿易する處にして、この外に、近時、新に、多くの港を開かれたり。

第十二課 貿易

萬國、イヅレモ、其ノ產物同ジカラズ。互ニ、有無ヲ通ズルヲ、貿易トイフ。

我が國ノ產ニシテ、外國ニ輸出スルモノハ、生絲、綠茶、米、漆器、陶器、磁器、織物、樟腦、摺附木、海產物、銅、石炭等、其ノ重ナルモノ、五十餘種

ニ及ブ。其ノ中、生絲ハ、五千萬圓以上ニ至リ織物ハ、二千萬圓ニ餘リ、茶、米、石炭等ハ、各、八百萬圓以上ニ及ベリ。

又、外國ヨリ、我が國ニ輸入スル品物ハ、機械類、石油、金屬、砂糖、穀類、綿、毛織物、毛絲、藥品等、數十種アリ。其ノ中、價額、一千萬圓以上ニ及ブモノハ、綿、鐵、綿布、毛織物、砂糖、機械等ノ類ナリ。

輸出ト輸入トノ總高ハ、一個年、三億九百萬圓餘ニシテ、年々増進ノ勢アリ。外國ト貿易シテ、輸出ノ金額、輸入ノ金額、輸出ニ過バ、其ノ國、愈富ヲ増シ、輸入ノ金額、輸出ニ過グレバ、次第ニ富ヲ減ズベシ。サレバ、國民タルモノハ、各業ヲ勵ミテ、產物ヲ多カラシメ、益、輸出ヲ盛ニスベキナリ。

(明治卅年未現在統計ニ據ル)

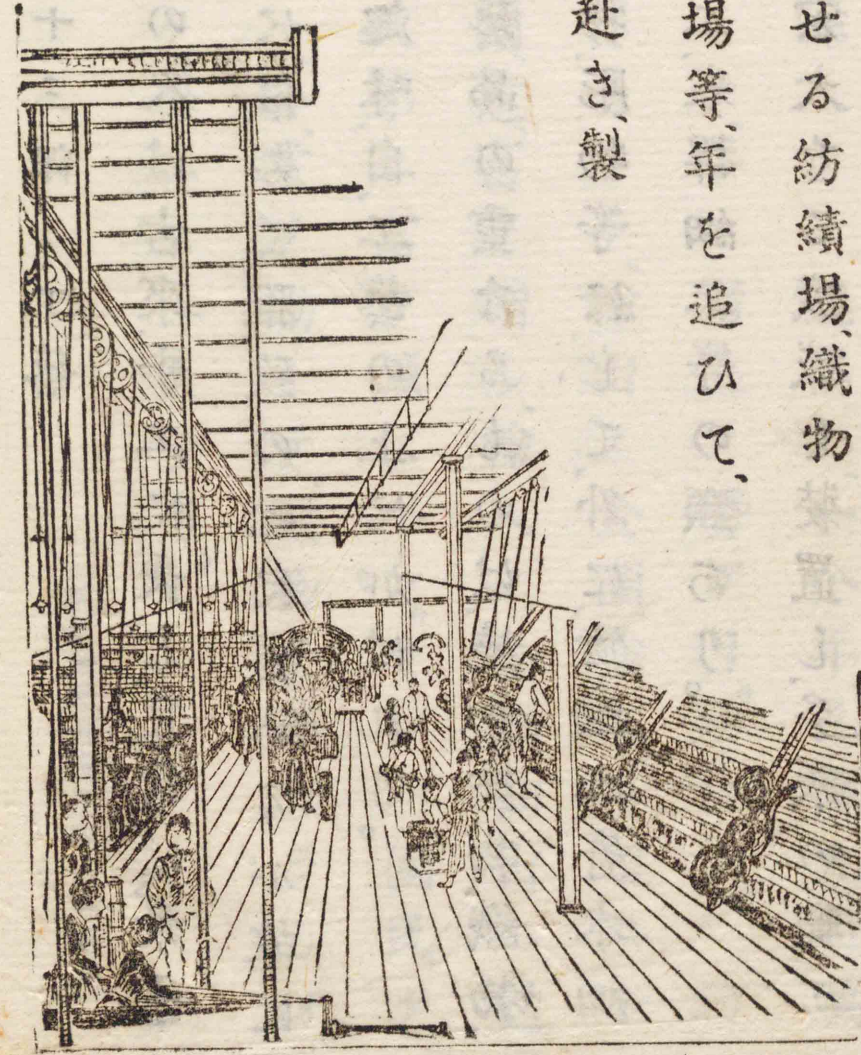
第十三課 工藝

我が國の人は、古來、手工に長じ、且、常に、景色よき地に住みて、雅致の心に富めるが故に、一種の趣味、自、工藝の上に加はれり。

我が工藝品の重なるものは、燒物、塗物、織物、染物、鑄物、彫物等にして、外に、竹細工、寄木細工、紙細工、麥稗細工等の類あり。

近來は、宏大なる機械を裝置し、多數の職工

を使用せる紡績場、織物
 場、製絲場等、年を追ひて、
 盛大に赴き、製
 造の高
 も、従ひ
 て、多き
 に至れ
 り。



又、工藝の技術を助くべき理科の學も、大に
 進みて、精巧なる機械を造り、水力、蒸氣力、若
 くは、電氣力等を籍りて、之を動かす術も發
 達したれば、製造品は、精良にして、價格も、低
 廉となれり。

第十四課 鑛物

工業、日二月ニ發達スルニ從ヒテ、原料ノ種
 類、益多キヲ加フ。殊ニ、鑛物中ニテ、必要ナル

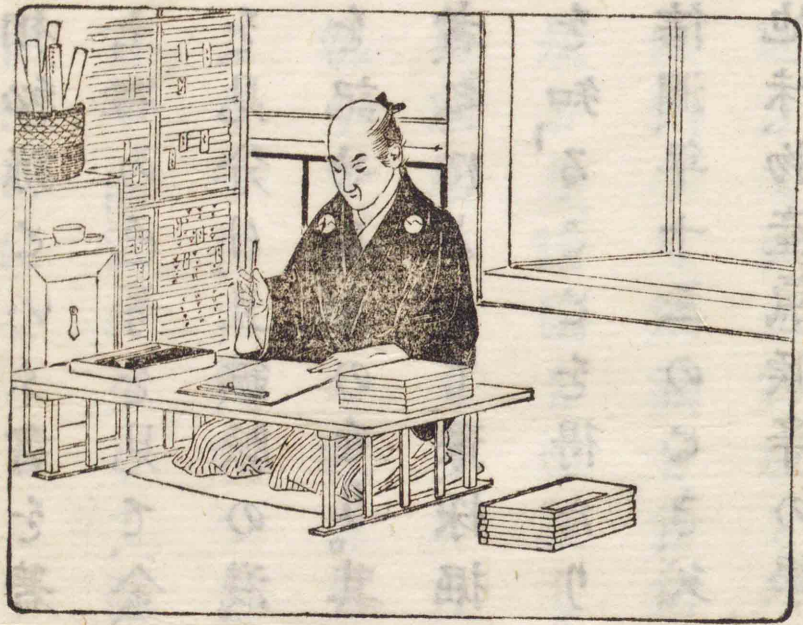
ハ、鐵、石炭、粘土、石材、金、銀、銅等ナリ。
 鐵ハ、岩手縣、廣嶋縣等ヨリ、多ク產出ス。鐵道
 ヲ敷キ、鐵橋ヲ架シ、鐵艦ヲ造リ、銃砲ヲ製シ
 機械、刀劍、庖刀、鐵瓶、鍋、釜等ヲ製スルニ缺ク
 ベカラザルモノナリ。
 銅ハ、足尾、尾去澤、阿仁等ノ鑛山ヨリ、多ク產
 シ、種々ノ器具ヲ製シ、又、電信、電話、電燈等ノ
 用ニ供ス。

蒸氣機械ヲ運轉シ、若クハ、銅、鐵等ヲ製スル
 ニハ、石炭ノ火力ニ依ル。染料ニ用ウルものに
 りんモ、亦、之ヨリ取ルナリ。此ノ石炭ハ、九州、
 北海道等ヨリ、多ク產シ、工業ノ進步ヲ助ク
 ルコト、頗大ナリ。
 佐渡、生野等ヨリハ、金ヲ產シ、院內、半田等ヨ
 リハ、銀ヲ產ス。之ヲ用井テ、貨幣ヲ製シ、裝飾
 品ヲ作ル。又、長石、粘土ニテハ、陶磁器ヲ製シ、

煉瓦ヲ作ル。御影石、大理石等ハ、壯麗ナル建築ニ用井、若クハ、彫刻物ヲ造ル用ニ供ス。鑛物ノ、人生ニ必要ナルコト、斯クノ如シ。コノ鑛物ヲ産スル山ヲ、鑛山トイヒ、之ヲ採ル業ヲ、鑛業トイフ。

第十五課 佐藤信淵

佐藤信淵は、出羽の人にて、世々、醫を業としたり。高祖父歡庵、飢饉にて、人の餓死するも



の多きを憂へ、之を救ふべき道を求めんとて、諸國をめぐり、物産、農業のことを究めて、人々にも、その方法を授けり。

祖父、不昧軒、最、鑛業の事にくはしくして、山

相秘録といふ書を著しき。この書ハ、山の形、土石の色等を見て、金、銀、銅、鐵、玉、石などの量を見分け、且、鑛脈の淺深をも知るべき方法を記せるものなり。其の後、鑛業に従事する者、之によりて、豫、採掘の難易、費用の多少等を知ることを得たり。

信淵、年十三のとき、父に従ひて、蝦夷に入り、地味、物産、氣候等の學を修め、後、陸奥、出羽を巡りて、風土、物産を研究し、下野の足尾銅山に到りて、銅鑛を分析する法を、父に學べり。是より、諸國を巡歴して、しきりに、農事を勧め、家居の暇もなかりしかども、尚、常に、筆を執りて、父祖の教を書きあつめけり。初、歡庵より、子孫五代、相つぎて研究すること、殆二百年。信淵に至りて、遂に、一家の學を成して、世に公にせり。

文法

は、に、を、て、の、を、より、及、が、や、か、こ、ろ、等、ハ、
言語ノ中間ニアリテ、上下ノ語ヲ接續關
聯セシム。之ヲ、て、に、を、は、又、ハ、助辭トイフ。

第十六課 佐藤信淵(三)

信淵、又、父の志を承けて、國學を修め、後、蘭學
をも究めしかば、天文、地理、測量、兵學等、一と
して、通ぜざるはなかりき。
其の頃、外國軍艦、我が近海に出沒し、又、商船
の來りて、貿易を求むるものありしかば、信

淵、海防の策を講じて、世に示せり。

信淵、尚、開墾、牧畜、鹽田等の法を究め、且、最、經
濟の道に委し。其の說に曰はく、國を富まさ
んには、海外との貿易を盛にすること、必要
なり。貿易は、出貿易をよしとす。出貿易とは、
我が國の人、我が國の船に乗りて、わが國産
を、外國に輸出して賣り、捌くをいふ。斯くせ
ば、利益多くして、且、外國の事情を知るに、甚

便利ならんといへり。當時世これを信ぜざりしかど、數十年を経て、其の言の理あるを知るに至れり。信淵の卓見、人にすぐれしこと、概この類ふり。

第十七課 旅行

旅行して、他郷に遊び、名勝の地に到り、或は山水の美しき佳境に臨まば、自然に高尚の心起りて、徳をすゝめ、智をひろむる助となるべし。

又、言ひしらぬ靈境にゆきて、見なれぬ山川の有様を觀て、目を悦ばしめ、その里人にあひて、風土を問ひなごし、或は奥まりたる山中にわけ入りても、もとより、山水のたしなみある人は、心留りて、歸ることを忘れぬべし。或は海はた、山遠くして、眼界ひろき眺など

は、王侯の富にも優れり。又、その里にれひ出
 でたる名産の、異なる品を見、その味を試む
 るも珍しかるべし。
 すべて、勝地にあそびて、見聞きすることは、
 只、その一時、耳目を悦ばしむるのみならず、
 幾年経とも、其の時の有様、老の後迄も、をり
 をりおもひ出でられて、あたかも、まのあた
 り、みきゝする思をして、樂かるべし。

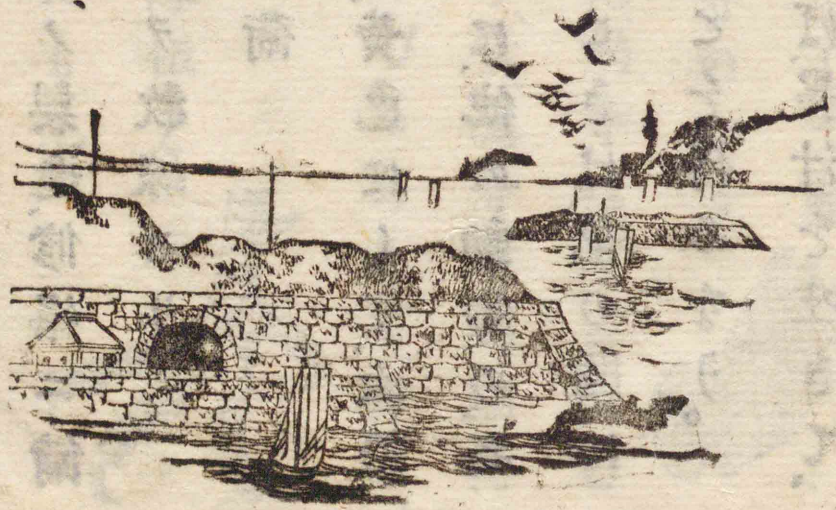
(樂訓參照)

第十八課 海防

我が大日本ハ、海國ナレバ、海軍ヲ備へ、砲臺
 ヲ築キテ、四境ヲ護ラザルベカラズ。
 現今、海防區域ヲ定メテ、之ヲ五區ニ分テリ。
 其ノ第一海軍區ハ、北ハ、陸中ヨリ、南、紀伊ニ
 至ル迄ノ海岸、海面、及、小笠原嶋等ニシテ、横
 須賀軍港ニ、鎮守府ヲ置キテ、之ヲ衛レリ。

第二海軍區ハ東、紀伊ヨリ、西、日向ニ到リ、北、
長門ニ到ル迄ノ海岸、海面、并ニ、内海等ニシ
テ、吳軍港ニ、鎮守府ヲ置キテ、之ヲ守レリ。第
三海軍區ハ、九州ノ西海岸、及、壹岐、對馬、沖繩
ノ海岸、海面等ニシテ、佐世保軍港ニ、鎮守府
アリテ、之ヲ管ス。
石見ヨリ、羽後ニ至ルマデノ海岸、海面ヲ、第
四海軍區トシ、舞鶴ヲ、軍港ト定メ、陸奥、并ニ、

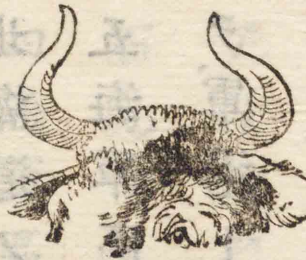
北海道ノ海岸、海面ヲ、第
五海軍區トシ、假ニ、室蘭
ヲ、軍港ト定ム。コノ二軍
港ハ、未、其ノ備成ラザル
ヲ以テ、横須賀、吳ノ兩鎮
守府ニテ、之ヲ分チ管ス。
鎮守府ニテハ、艦隊ヲ備ヘ
テ、各、海軍區ヲ守リ、造船所、



及、船渠等ノ設アリテ、軍艦ノ製造、修繕ニ備フ。又、海兵團ヲ置キテ、水兵ヲ教練セリ。

第十九課 動物の自衛

菜の花にすむ蝶は、その羽、黄色にして、大根の花にすむものは白し。故に、他の動物の之を捕らんとするとき、花の間に匿れて免るゝことを得るなり。



烏賊は、敵に逢へば、墨汁を吐きて、

水を濁し、身

を匿して、難

をのがる。鹿、



牛等の如き



獸は、角を以て、敵を防ぎ、虎、猫等は、牙と爪とを、武器とし、猪には、牙あり、鷲、鷹等の鳥類には、嘴と爪とあり、雞には、けづめありて、皆、各、身を護る利器とす。

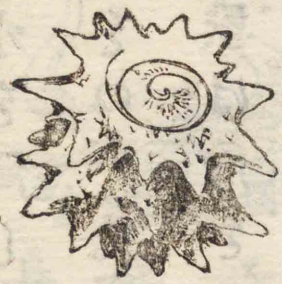
又、雁、鴨の如きは、隊伍を

なして、眠る間にも、見



張を置くこと、恰軍隊に哨兵あるが如し。此の如く、動物には、各身を衛る、自然の備あるなり。

こゝに、をかしき話あり。ある榮螺、自殼と蓋との堅きを恃み、常に、他の魚にほこりて、吾は、斯かる甲冑を着たれば、世に、恐しきものなしと謂へり。



一日、水上より、ざと音して、網下

り來りしかば、鯛、平目など、大に驚きて、逃ぐるもあり、或は、後れて、網にかゝれるもありしに、榮螺は、堅く、蓋をとちて、物ともせず、却りて、鯛、平目等のあわて、愕くを、怯懦なりと嘲り笑へり。

程經て後、榮螺は、己が殼の暖に在れるに、如何なる故ぞと、蓋を、すこしあけて見れば、水中にはあらで、既に、火の上にかけられて、下

よりあぶらるゝなりけり。みだりに、自恃みて、他を知らざれば、この榮螺の如く危かるべし。

第二十課 大砲

現今、兵器ノ中ニテ、最勝レタルハ、大砲ナリ。一發ニシテ、軍艦ヲモ撃チ沈ムベク、砲臺ヲモ破ルベク、又、一時ニ、數十百人ノ生命ヲモ奪フベシ。

陸上ニテ用ウル大砲ハ、之ヲ大別シテ、山砲、野砲、攻城砲、及、海岸砲ノ四種トス。山砲ハ、最輕ク、馬ナドノ力ヲ借ラズシテ運ブヲ得ベシ。山地ノ戰ニハ、之ヲ用ウルナリ。野砲ハ、山砲ニ比スレバ重キ故ニ、馬ニ牽カセテ、野戰ニ用ウ。ソノ彈丸ハ、山砲ヨリモ、遙ニ遠キニ達スベシ。攻城砲ハ、市街ヲ圍ミ、或ハ、城砦ヲ毀タントスルニ用ウルモノニテ、

山砲、野砲ニ較ブレバ、甚大ニシテ重キモノナリ。海岸ノ要地ニ備フルヲ、海岸砲トイフ。ソノ大ナルモノ、彈丸ハ、一カトヘニモ餘リ、直立セシムレバ、高サ、人ノ身ノ丈ホドアリテ、重量ハ、馬三匹ヲ合ハセタル程ナリ。コレヲ發射スベキ砲身ノ巨大ナルコト想ヒ知ルベシ。ニモ、大砲ハ、山砲

軍艦ニ備フル大砲ニモ、亦種々アリ。其ノ中、速射砲ト稱スルモノニハ、一分時間ニ、三十回發射シ得ベキモノアリ。又、機砲ニハ、一分時間ニ、一千發ヲ放ツヲ得ベキモノモアルナリ。

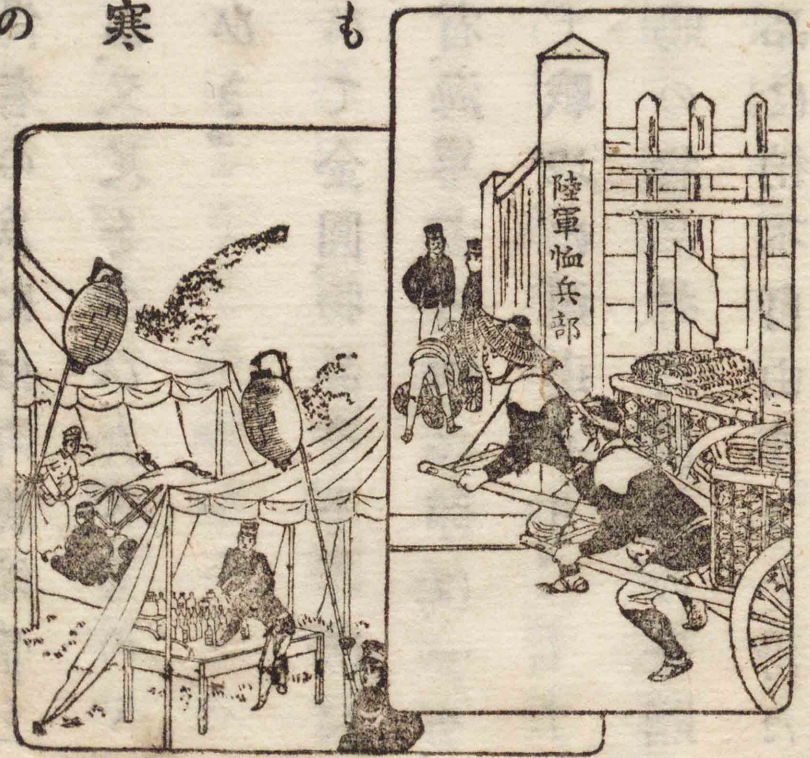
文法

うへなるかなノかなハ、感歎ノ詞ナリ。又、語句ノ首ニ、用ウルあ、やあ、いかん、いざ、すはナドモ同シ。是等ヲ、感動詞トイフ。

第二十一課 恤兵

國を護るは、軍人の任にして、その勞苦を慰めて、勇氣を勵ますは、國民の務なり。征清戰役の時、將士、敵地の寒暑に曝さるること、殆、一年に及べり。其の間、政府の給與なきにあらざりしかども、氣候、風土の異なる敵地をれば、何事も不自由に、わけて、日常用品の缺乏甚しきことありき。大元帥陛下には、廣嶋の大本營におはしま

して、遠く、外征將士の艱難をおぼしやらせ給ひ、屢優詔を下し給ひて、種々の用品をも惠ませ給へり。皇后陛下も、亦、防寒の具として、真綿の



類を下し賜ひ、負傷者の爲には、御親、繙帶を製して惠ませ給ひ、又、足を失ひたるもの爲には、義脚を賜ひき。

國民も、また相競ひて、金圓、物品等を、軍隊に贈りければ、陸軍省、海軍省の恤兵部は、一々、これを取り次ぎて、戦地に運送せり。

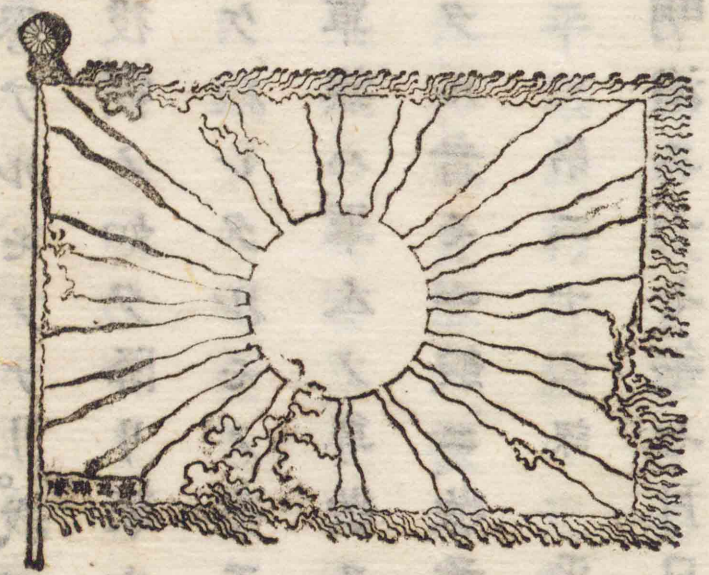
かくて、軍隊は、恩賜の物品、并に、國民の寄贈物によりて、日用品に、稍、不自由なきを得たり。兵士等の悦、如何ばかりなりけん。

又、日本赤十字社にては、數多の醫員、看護員等を、戦地に送り、内地の衛戍病院にも、醫員、看護婦等を派して、多くの傷病兵を救護せり。この日本赤十字社は、皇室の御庇護を受け、有志者の協力によりて組織せるものにて、平時に、準備を整へ、戦時には、敵味方の別なく、傷病者を救護するを、主旨とせり。

第二十二課 軍旗

軍旗ハ、又、聯隊旗トモイフ。聯隊ヲ組織スル時、大元帥陛下ノ下シ賜フモノナリ。コノ軍旗ノ向フトコロハ、即、陛下ノ大命ノ存スル所ナレバ、我が軍人タラシモノハ、如何ナル危険ヲ冒ストモ、身ヲ顧ミズシテ進ムベシ。又、コノ軍旗ノ立ツ處ハ、假令、敵地ナリトモ、御國ノ領土ニ等シキガ故ニ、如何

ナル困苦ニ遇フトモ、之ヲ護リテ、一步モ退



クコトナカルベシ。幾許ノ戰場ヲ經テ、風ニ曝サレ、雨ニ濡レ、彈丸ノ痕サヘ殘リテ、イト古ビタル軍旗ハ、勳功ノ多カリシコトヲ顯セルモノニテ、最、名

譽アルモノナリ。我が國ノ軍旗ニハ、征清ノ
役、霰ノ如ク降り來ル彈丸ノ中ニ立ちテ、裂
ケ破レタルモノモアリ。古ヨリハ、軍旗ハ、
軍旗ハ、軍人ノ、尊敬スベキノミナラズ、國民
タル者モ、一般ニ、敬意ヲ表スベキナリ。

第二十三課 平壤の戦

明治二十七年七月、日清の平和破れし時、清
軍、一部は、成歡、牙山に據り、一部は、平壤に據

りて、我が軍を夾撃せんとす。わが軍、先、成歡、
牙山の敵を破り、轉じて、平壤に向へり。

平壤は、朝鮮國の北部にありて、前には、大同
江の流を控へ、後には、牡丹臺の險を負へる
天然の要害なり。二萬の清兵、これに據り、新
に、數多の砲壘を築き、兵器、金穀を、多く貯へ
て、備を嚴にせり。

我が軍、合撃の策を定め、道を分ちて進み、九

月十九日の未明に
は、諸道の軍隊、悉平
壤に達し、四面より、
齊しく攻めかけた
り。その一隊、大同江
の此方なる、田圃の
間より、雨と降り來
る弾丸を冒して進



撃せるを、敵は、全力を集め、必死となりて防
戦せしに、他の一隊は、疾く、牡丹臺の壘下に
迫りて、遂に、之を乗取れり。

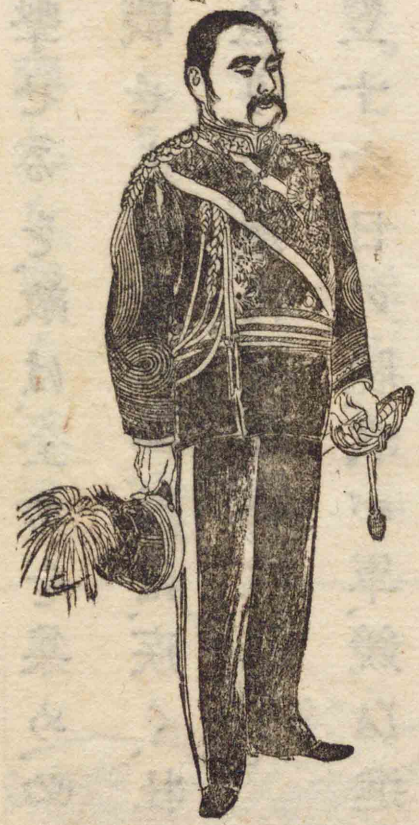
翌十六日の曉、我が軍、競ひ進みて、遂に平壤
を陥る。日章の御旗、高く、城頭に翻り、朝日に
輝きて、勇しき様なりき。

第二十四課 有栖川宮

征清の役に當り、大元帥陛下の帷幕に參

して、最大功あらせられしは、參謀總長有栖川宮熾仁親王殿下なり。

親王、徳望殊に高くましくて、夙に力を國事に盡し給ひ、明治の初、征東大總督となり、



官軍を率ゐて、江戸に下り、朝敵を夷げて、維新の大業をた

すけ給ひき。

明治十年、西南の役、再、征討總督となりて、九州に下り、殆一年の間、つぶさに、征戰の苦を嘗め給ひ、亂を平げて凱旋し給ひき。

尋いで、陸軍大將に任ぜられ、左大臣となり、近衛都督、參謀總長、神宮祭主等に、補せられたまへり。

明治二十七年の夏、陛下に扈從して、廣嶋

に到り、專征戰の參畫に、力を盡し給ひ、翌一月、疾に冒され給ひながら、強ひて、劇務に當らせ給ひしに、その二十四日、遂に薨じ給へり。時に、御年、六十一。

陛下、震悼まじし、て、朝政を廢し給ふこと、三日、國葬の禮を以て、厚く葬らしめ給ひき。親王、資性温雅にして、寛仁大度にまじく、威儀端莊にして、忠亮恪勤の徳をも兼ね給

ひ、國事に盡し給ふこと、數十年、一日の如くおはしき。實に、中興の元勳、國家の柱石と申し奉るべきなり。

文法 征清の役ハ、名詞、のにハ、てにをは、當り、參しハ、動詞、最ハ、副詞、られしハ、助動詞、高クハ、形容詞、尋いでハ、接續詞ナリ。

第二十五課 御國の民

(一)

御國の民よ わがはらからよ

國の爲つくせ 君のためほくせ

家のとめ身の爲 つくせよつくせ

矢玉ふるなかを おそれずをゝ免

太刀うつ下も ひるまざるめ

旭乃はたの ひるがへる處は

これ我が國ぞ みなわが國ぞ

(三)

御國の民よ わがはらからよ

つゝ此音ひいき ときの聲きこゆ

君の爲こゝろ哉 ほくせよつくせ

かばねつむ山も ふみこわすゝめ

ちほの川も をどりてすゝ免

旭此旗の ひるがへる處は

これ我が國ぞ みなわが國ぞ

(三)

御國の民よ わがはらからよ

高等小學讀本卷之二終

暴風ふきまきて 敵の旗をびく
國の爲わが身を つくせよほくそ

こほりたる海も いきまきわたり
沙漠の中を いとはずすゝ免

旭の旗のひるがへる處は
これ我が國ぞよみなわが國ぞ

高等小學讀本卷之二終

(高等小學讀本與附)

明治三十二年十一月一日 印刷
明治三十二年十一月五日 發行
明治三十三年一月一日 修正再版印刷
明治三十三年一月四日 修正再版發行

定價	
卷ノ一金貳拾錢	卷ノ五金貳拾貳錢
卷ノ二金貳拾錢	卷ノ六金貳拾貳錢
卷ノ三金貳拾壹錢	卷ノ七金貳拾貳錢
卷ノ四金貳拾壹錢	卷ノ八金貳拾貳錢
全八冊	金壹圓七拾錢



編輯者 西澤之助
印刷者 河本龜之助
發行者 光社

西澤之助 東京市京橋區築地二丁目二十一番地
河本龜之助 東京市京橋區築地二丁目二十一番地
光社 東京市京橋區築地二丁目二十一番地
(電話新橋八十八番)

